

ポルカドット号探検記

「トロールは怪獣？妖精？」

松本市美術館館長 小川 稔

今回の「北欧の神秘展」では、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの知られざる画家たちが多数紹介されている。ムンクはよく知られているが、同じノルウェーで6歳上の画家、テオドール・キツテルセンの《トロールのシラミ取りをする姫》の不思議な印象はどうだろう。王冠を着けた女性が、毛むくじやらの巨大な生物(トロール)を相手にしている。これはキツテルセン自身が、ノルウェーに伝わる民話を元に創作した物語の一場面なのだという。トロールについては北欧各国で語られているが、その姿、大きさはまちまちで、醜い老人であったり、小さな妖精であったりする。ようするに、その本質は誰も見たことのない霊的存在だということ。暴力と純朴さが同居する幻獣として人の心に宿り続けたのだ。これは私たちの祖先が、天狗や河童を信じたことに似ている。



テオドール・キツテルセン《トロールのシラミ取りをする姫》1900年
ノルウェー国立美術館 Photo: Nasjonalmuseet / Borre Hostland

急速な産業化、都市化への反発。そうした危機感が故郷の自然や歴史を見直させ、結果として土の匂いにする個性的な文化が各国に生まれたのだ。だからトロールには、自然破壊への警鐘やバランスを欠いた社会を正す役割も期待されたのではないか。そうならば、目下話題の我らのゴジラも現代のトロールではないかという気がしてくる。

ART EXHIBITION GUIDE 当館学芸員 中澤 聡

ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、各国の国立美術館が所蔵する絵画が海を越えてやってきます。作品数は約70点、19世紀から20世紀初頭にかけて活躍した47名の北欧画家の手によるものです。

19世紀、それまでフランスやドイツといった大陸諸国の美術に範をとっていた北欧の画家たちは、ナショナルリズムの高まりを背景に、独自の芸術を模索するようになります。彼らが関心を寄せたのは特有の気候風土が育んだ母国の自然や歴史、文化。これらモチーフが絵画の世界に幻想的に表され、北欧絵画は花開きました。

当時、北欧で発展したこの新しい絵画芸術は、共通の特色を備えています。例えば、冬景色をモチーフとした作品。北極圏を有し、1年の半分が雪と氷に閉ざされる北欧では、冬の情景



1. ヴァイノ・ブロムステット《冬の日》1896年
フィンランド国立アテネウム美術館
Photo: Finlands Nationalgalleri / Hannu Pakarinen
2. ヨーハン・フレドリク・エッケシュバルグ《雪原》1851年
ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet / Jacques Lathion
3. エウシェン王子《工場、ヴァルデマッシュウッドからサルトシュークヴァーン製粉工場の眺め》
スウェーデン国立美術館
Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

Relay Essay

環境が変わる

当館学芸員 原澤 知也

今年の4月から松本市美術館に配属となった。3月までは松本市立博物館で古い資料に囲まれ、松本の歴史を探る仕事をしており、引き続き学芸員として仕事ができることに喜びを感じている。しかし、小学生のころの美術の成績が5段階中「3」、先生からは「一生懸命さが伝わるとコメントをいただいた

た凡庸な芸術センスの持ち主である私が、美術館の学芸員として働くことが出来るのかと不安を抱きながら日々過ごしている。

さて、美術館で芸術作品に囲まれていると、作品や展示の見方が変わってきたように思う。博物館にいたからかもしれないが、美術館の作品キャプションはタイトル、制作年、作者のみの簡潔なものが多いと感じる。さらにタイトルが「無題」という作品もあり、さてどうやって作品を鑑賞すればいいのかと途方に暮れてしまうことがある。思い返せば自分は展覧会に行っても、作品の作者や時代背景、資料としての価値が気になってしまい、無意識にその作品や資料に何が書かれているか文字情報を探し、キャプション解説を読み、作品を見ずに文字ばかり追っていた。それは作品をしっかりと見たことにならないのかもしれない。作品の前に立って、先入観なく見て感じることに、自分なりの解釈をするということが必要で、その上で作品の背景、技法など知れば、作品や展示をより楽しむことができるということに今頃になって気づいた。

環境が変わると気づきや学びがある。これから多くの作品を見て考え、その素敵さや美しさを自分なりの言葉で伝えることができる、そんな学芸員になりたい。



が好んで描かれました(図1)。また、ナショナル・アイデンティティを構築するのに視覚芸術が重要な役割を果たしたことも共通項として挙げられます。華々しく壮大に描かれた風景画(図2)や神話、民間伝承の物語を題材とした絵画は、国のイメージ形成に一役買っていました。

一方で、国や地域ならではの芸術表現も発展します。19世紀、特に急激な近代化が進んだスウェーデンでは、刻々と変わりゆく都市の景観がモチーフとして取り上げられ、自然や古くから伝わる物語とは趣のなる神秘的な絵画が登場しました(図3)。

地続きとはいえず、これまで歩んできた道は三国三様。ぜひ本展を通じて、各国の歴史や文化に触れる機会ともなりましたら幸いです。

THE MAGIC NORTH

北欧の神秘

ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画
ART FROM NORWAY, SWEDEN AND FINLAND

会 期 / 2024年7月13日(土)~9月23日(月・祝)
休 館 日 / 月曜休館(ただし、祝日の場合は翌平日)※8月は無休
開館時間 / 9時~17時(入場は16時30分まで)
観 覧 料 / 大人1,500円、大学高校生・70歳以上の松本市民1,000円

※中学生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料 ※20名以上の団体は各200円引き
※オンラインチケットによる購入は100円引き(大人・大学高校生のみ)
※大学高校生と70歳以上の松本市民は、観覧当日、証明書(学生証、免許証等)の提示が必要





《釜 竹林群雀文》

当館学芸員 稲村純子

本作は、池上百竹亭コレクションの内の一点。このコレクションは、松本市の文人・池上喜作(1890-1978)が蒐集した、正岡子規及びその門人に関係した近代文芸資料を中心に、絵画・工芸作品等を含む221点からなる。

香取秀真は、近代工芸史に大きな功績を残した鑄金家である。鑄金とは、金属工芸の技法の一つで、溶かした金属を型に流し込み、冷却して取り出した後、表面を研磨等して仕上げる。秀真は作家としてだけでなく金工史研究者としても活躍し、1953年



作者：香取秀真(1874-1954)
 作品名：釜 竹林群雀文
 技法・材質：鑄造・鉄
 サイズ：高21.2×胴径22.5×口径12.6cm



には工芸家として初めて文化勲章を受章した。妻が現在の塩尻市出身だったため長野県に訪れる機会が多く、戦時中は松本市に疎開している。正岡子規門下の歌人でもあった秀真が、同じく子規に傾倒していた池上と出会い、交友を深めたことは自然の流れであつたのだろう。

本作は、茶の湯の席で湯を沸かすために用いられる釜で、真形釜と呼ばれる形式のもの。口の部分は線口と呼ばれる造りで、口の立ち上がりが一度くびれたあと外側に向かって開いている。整った丸形で、鬼面の鑲付(釜を動かす時に鑲を通す耳)が付き、下寄りにはひさしのような羽をめぐらせている。胴には、取り合わせが良いとされる竹と雀の図が施されており、替蓋には竹に雀がとまった可愛らしいつまみがあしらわれている(下写真)。

秀真は、高度な伝統的技術を用い、東洋や日本の古典紋様や形に基づきながらも時代感覚を取り入れ、実用を重視した作品を多く制作した。

この秋、香取秀真の珠玉の作品が一堂に会する展覧会を開催します。是非ご覧ください。(会期/2024年10月12日〜12月1日)

身近な ART 「軒下の鍾馗さん」 当館学芸員 北原 麻椰



我が家の軒下には、口を一字にむすび、北東の鬼門に睨みをきかせる瓦でできた像がある。その名は「鍾馗さん」。松本の町では、あまり見かけることはないが、関西、特に古い町並みが残る京都や奈良の町屋の屋根瓦の上や軒下などには、鍾馗像が家の守り神として置かれている。端午の節句でも「鍾馗さん」は子どもを病魔から守る縁起の良い人形として飾られる。

そもそも「鍾馗」とは唐の時代に実在した人物であり、髯面の大男だったと言われる。しかし、悲しいことに官僚登用試験である科挙でその容姿を理由に不合格となり、命を絶つてしまった。その後、病に伏す時の皇帝・玄宗の夢の中に出てきた鍾馗は、手厚く葬られた恩に報いるため皇帝の命を救い、それに感謝した皇帝は鍾馗を神様として祀ったという。

我が家の「鍾馗さん」はそんなエピソードを感じないほど凛として恰好がいい。父曰く、家が出来上がった際の軒下に物足りなさを感じ、建築家と相談し「鍾馗さん」の登壇をひらめいたという。偶然的の産物と言っては「鍾馗さん」に失礼になるが、小さいながらもどっしり構えるその姿は、白い漆喰の壁に映え、わが家の景観のアクセントになっている。

ミュージアムショップ便り 当館ミュージアムショップ 店長 鬼頭 千佳

当館には田村一男記念展示室がある。その作品群は、私たちが実際に信州の地に立ったときに纏う空気が巧みに表現されている。展示室で深呼吸をすると、そこに吹く風や香りまでも感じることができるかのようだ。

ミュージアムショップでは、田村一男の作品《高原》(1986年 油彩・キャンバス)をパッケージに使用した石鹸を販売している。製作は地元で採れるものを使い、昔ながらの低温製法を

用いて石鹸づくりをしている長野県辰野町の[kakapoせっけん]が担ってくれた。

主要オイルに長野県美ヶ原産の鹿脂、色や香りづけには信州産の植物を使用。作品の空気感を凛とした香りや色で表現。目でも香りでも堪能できるこの石鹸で、肌も心も潤ってほしい。

●田村一男オマージュ 町と山せっけん Deer Soap 2,200円(税込)
 ※価格は変更になる可能性がありますのでご了承ください。



Workshop report

今年の「工芸の五月美術館ステージ」では、異形の宴『生命の像 イノチノカタチ』、ワークショップ異形の宴『お面作り』、建築家とめぐる城下町みずのタイムトラベル〈旧町巡り 中町編〉の3つの企画を開催しました。

どの企画もたくさんの方に来ていただくことができ、これをきっかけに工芸や美術について、さらに興味を持っていただけたら嬉しく思います。



異形の宴『生命の像 イノチノカタチ』

5名の現代作家による、動物をモチーフとした立体作品の展覧会。漆や金属、木、石、陶などの素材を活かして制作された作品の数々は、工芸と彫刻の狭間を意識したものとなっており、それぞれの作家の生命への思いが感じられる、個性溢れる展示でした。



明田一久(スワローズスキーヤー)(部分)



ワークショップ 異形の宴『お面作り』

厚紙でできたお面に絵の具で絵を描いたり、布や紙を切り貼りして、自分だけのお面を作るワークショップを開催しました。講師が用意した型を参考に、「どんな形のお面にしよう。」「何色がいいかな。」と、悩みながらみなさん真剣に作っている様子。お子さんから大人の方まで終始楽しそうに制作され、完成後は早速、作ったお面をつけて写真撮影をしていました。



建築家とめぐる 城下町みずのタイムトラベル 〈旧町巡り 中町編〉

地元で活躍する建築家と、大学で建築を学ぶ学生達の案内で、まちの工芸や建築、湧水を巡り、歴史を知るまち歩き企画。今年は中町とその枝町を散策しました。見知った場所であっても、様々なところにまちの歴史を感じさせる発見があり、川や井戸といった水場をたどりながら、今と昔の変化について、建築家の解説に耳を傾けていました。

